

2002年09月25日

日本心理学会第66回大会 ワークショップ「スピーチにおける感性情報-3-」
[発表概要]

演題(2):「対話における間の役割～実験的検討～」

所属:大阪大学大学院人間科学研究科

氏名:長岡千賀

[背景および目的]

対話においては、話し手と聞き手の交互の入れ替わりが時系列的に繰り返され、この時系列の中で対話者による相互作用が生じる。この相互作用をあらわす現象に、2話者の交替潜時(対話の間、一方の話者が話し終わってから次の話者が話し始めるまでの時間間隔)の長さが互いに近似する現象がある。韻律情報が2話者間で類似することは同調傾向と呼ばれるが、この現象は初対面の2者による対話においても観察される。したがって、交替潜時の長さは対話の時系列の中で相互依存的に決まることが推測される。また、対話における韻律情報を研究する際には、2話者間の相互作用に着目する必要があると言える。

本発表では、同調傾向の研究例をいくつか紹介しながら、同調傾向について解説する。さらに、交替潜時が対人認知に及ぼす影響を、同調傾向の観点から調べた研究を解説することにより、交替潜時が音声対話においてどのような役割を果たしているかについて考察を深める。

[内容]

(1) 話者同士の相互作用に着目する必要性

- ・対話の間とは～交替潜時～
- ・交替潜時の長さの2話者間類似
- ・話者同士の相互作用に着目する必要性

(2) 韻律情報の2者間類似～同調傾向～

- ・同調傾向とは
- ・同調傾向が及ぼす心理的影響

例:交替潜時が対人認知に及ぼす影響(観察者による評定実験)

[課題]

- (1) 現実の対話場面におけるデータとの関連
- (2) 音声対話システム研究への提案
- (3) 対話における2者間の相互作用の解明

[参考文献]

長岡・ドラグナ・小森・中村, 音声対話における交替潜時が対人認知に及ぼす影響, ヒーマンインタフェースシンポジウム2002 論文集

[連絡先]

E-mail: nagaoka@hus.osaka-u.ac.jp
